

光を表す擬態語の使い分け

前 田 千菜美

1. はじめに

童謡「きらきら星」の「きらきら」は、星が光る様子を表現しているのだが、これは星が光る際に聞こえる音ではなく、本来は音のない光る様子を文字で表現した擬態語である。光を表現する擬態語は「きらきら」だけではない。先ほど挙げた「きらきら星」の別の日本語歌詞では、「おほしさまびかり」と、「きらきら」とは別の擬態語「びかり」が使われている。擬態語の数は多く、意味が類似したものも多い。光を表す擬態語も、上述した「きらきら」「びかり」の他にも数多く存在する。用いる場面や対象から考え、自らの表現に適したものを選ばなければならない。僅かな意味合いの違いによる使い分けは、日本語母語話者ではない留学生等、また、日本語母語話者であっても難しい。特に擬態語に関して、小野（2007）は「欧米語には少ないので、外国人には理解しにくく、日本語を習得する際、苦心するようであり、逆に日本語を翻訳するときにも、その語を持つ感じをどう訳すべきか、苦勞するようである」と述べている。しかし、上手く使い分けることができれば、自分の感情やその時の状況を、適切に伝えることができる。本稿では、このように曖昧となっている擬態語の使い分けを、場面や対照から考察し、明確にしていく。

2. 研究の目的と意義

数多い光に関する擬態語の中から、日常主に用いられているものを辞書類の中から選出し、使用場面や光る主体、動詞等の文脈により選択される擬態語の違い、また、形態の違いによる表現の変化について調査し、使い分けを明確にしていく。使い分けを改めて認識することで、自身の表現に最も適した擬態語の選択や、留学生等の日本語学習の一助となれば幸いである。

3. 先行研究と辞書類での記述

3-1. 擬態語の定義

田守・ローレンス（1999）は、「オノマトベは、もっとも一般的な定義では、現実の音を真似ている語、あるいは少なくともそのようにみなされる語を指す（ぎしぎし、quack等）。しかしながらこの述語は、声を含む音を表す語に対してだけでなく、動作の様態（くねくね、plump等）や、肉体的（ぽっちゃり）あるいは精神的（もっさり、sluggish）な状態を描写する語に対しても、用いられることがある」としている。前者の様に耳に聞こえる音を文字で表したものが擬音語、後者の様に音がなく耳以外で受けた感覚を文字で表したものが擬態語である。これらは英語のonomatopoeiaもしくはフランス語のonomatopéeを日本語発音にした「オノマトベ」と表現されることがあり、本稿では擬態語や擬音語をまとめた語として「オノマトベ」を用いる。

擬態語で表現されているものを、擬態語を用いず表現するのは難しい。小野（2007）は「肉体感覚や心の感覚を表そうとしたとき、ないと困るもの。ふだんはよく認識して使っているわけではないけれども、よくよく思いを巡らせてみると、自分たちの用いている日本語の中に深く根を下ろしているもの」と述べている。また、田守・ローレンス（1999）は「英語のオノマトペは幼稚、オーバーな表現だと見なされている。（中略）日本人は成人でも日常会話において進んでオノマトペ語彙を使うが、このことは、これらの語が日本語において重要かつ独立した語彙層を形成しているという印象を与えるものである」と述べており、オノマトペは日本語において、なくてはならないものとなっていると言える。

3-2. オノマトペの語基と語尾

オノマトペには、「きらきら」「きらり」「きらっ」の共通部分「きら」の様な「もと」が存在する。小野（2007）はこの「もと」について、「オノマトペの中核にあって、基本的なニュアンスを作る。そして、この『もと』に、さまざまな、オノマトペらしい成分をつけて、より細やかな味わいを重ねてゆく」と述べている。同じ「もと」から派生したオノマトペは似た意味合いを持つ。田守・ローレンス（1999）はこの「もと」を「語基」と称しており、本稿でも語基とする。小野（2007）の上記述にある「オノマトペらしい成分」とは、「きらきら」「きらり」「きらっ」等、語基の後につく語尾のことである。語尾が異なることでオノマトペのニュアンスに違いが生じている。田守（2002）、小野（2007）の記述をもとに、オノマトペの語尾についてまとめた表を以下に示す。

<表3-2>オノマトペの語尾によるニュアンス

繰返し	今まさに続いているというニュアンスを表す
っ(促音)	非常に瞬間的な区切り目がつくというニュアンスを表す
り	一連の動作や状況をひとまとまりとして表現し、落ち着いたニュアンスを表す

他、撥音「ん」や長音「ー」等を含め、語尾部分は「オノマトペ標識」と呼ばれ、日本語のオノマトペにおける音韻、形態的な特徴であるとしている。本稿では調査対象を絞るため、『日本語オノマトペ辞典：擬音語・擬態語4500』の中から<表3-2>に示した語尾がある「きら系」「ぎら系」「びか系」「ちか系」、以上4つの系統の擬態語をアンケートの調査対象として取り上げる。

3-3. 擬態語と音象徴

ある音が、語の固有の意味とは別の象徴的な意味を表すことを音象徴と言う。小野（2007）は、「個々の音は、オノマトペとして用いられる際には、だいたい定まった雰囲気を示すようである」と、オノマトペと音の結びつきがあることを述べている。清濁の違いでも、語のニュアンスは変わる。田嶋（2006）は「清音には軽快、清らか、小さいという印象が持たれ、濁音には鈍重、濁り、大きいという印象があり、時には否定的なイメージを持たれる傾向にある」と述べている。「トントンとドアをたたく」より「ドンドンとドアをたたく」方が、ノックす

る手の力は強く、音も大きく感じられるように、濁音になることで音象徴が変化し、ニュアンスが大きく重くなる。擬音語はもちろん、実際には音のない擬態語についても言えるとする、「きらきら」と比べその濁音である「ざらざら」はより強い光のニュアンスを持つということになる。芋阪(1999)はこれを「濁音効果」として、擬態語でも確認できると述べている。また、田嶋(2006)が「否定的なイメージをもたれる傾向にある」と述べているが、田守(2002)は次のように述べている。

(a) ざらざら照りつける太陽の下での練習はきつくてたまらない。

(b) 一度でいいからざらざら照りつける太陽の下で泳いでみたいものだ。

これらは、いずれも太陽が激しく照り付けている様子を描写している。しかし、有声の「ざらざら」が用いられているにも関わらず、(a)が否定的なニュアンスを含んでいるのに対し、(b)はそのようなニュアンスを含んでいない。この違いは、話者の判断の相違によって生じているものと思われる。

太陽が「ざらざら」照りつけることが否定的かは、用いられる場面や感情によって変わり、濁音が必ず否定的なイメージと結びつくわけではない。『日本大百科全書』では、擬声語・擬態語について、「擬声語・擬態語は、語音と意味とが直接的に結び付いているため、理性よりも感情に訴え、迫真的効果をあげる」とあり、オノマトペは使用者に密接していると分かる。

4. アンケート調査と集計

日本語母語話者を対象に、光に関する擬態語の使い分けについて調査するため、光る主体や場面の異なる各設問に選択肢から擬態語を選択させるアンケート調査(別添資料参照)を行った。

<表4-1>アンケートの選択肢

a きらきら	b きらつ	c きらり	d ざらざら	e ざらつ	f ざらり
g びかびか	h びかつ	i びかり	j ちかちか	k ちかつ	l ちかり

4-1. アンケート回答者の内訳

アンケート回答者の内訳は次の通りである。

<表4-1-1>年代別内訳

10代	20代	30代	40代	50代	60代	合計
179	180	25	53	49	14	500

<表4-1-2>出身地別内訳

山口	広島	長崎	岡山	福岡	佐賀	島根	大分	香川	愛媛	兵庫
136	85	76	47	36	17	16	14	13	11	7

宮崎	熊本	鳥取	茨城	大阪	東京	静岡	神奈川	愛知	鹿児島	千葉
7	6	4	3	3	2	2	2	2	1	1
北海道	和歌山	埼玉	高知	岐阜	京都	栃木	滋賀	群馬		合計
1	1	1	1	1	1	1	1	1		500

＜表 4-1-3＞男女別内訳

男	女	合計
183	317	500

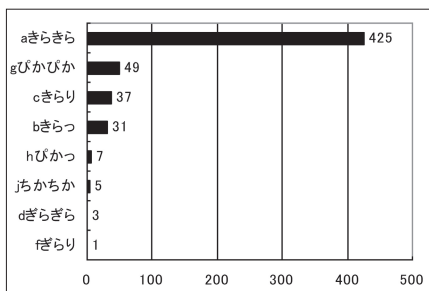
＜表 4-1-4＞職業別内訳

学生	社会人	合計
338	162	500

4-2. 集計と分析

設問ごとに表とグラフで表示する。表の項目は選択数が多い順から表示した。複数選択可のため、合計が回答者数を越えることがある。また、選択数が0の選択肢はグラフから省略した。

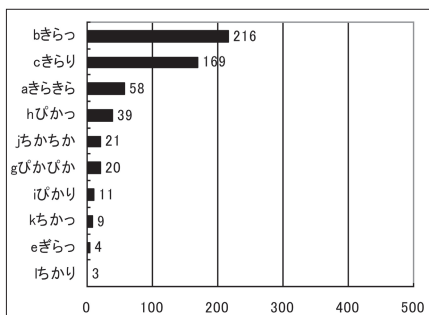
設問 1. 夜空に星が（ ）と光っている。



＜図 4-2-1＞星-光っている

設問 1 の光る主体は「星」、最も選択されたのは＜aきらきら＞であった。他の選択肢と比較して圧倒的に選択されている。日常的なイメージ等からか、星と＜aきらきら＞とが強く共起していると認識されている。＜aきらきら＞は繰返しの形の擬態語であり、繰返しの形は状態が続いている継続性を表す。「光っている」というテイル形の動詞が後接していることにより、光が継続していると感じ、この形が選ばれたと考えられる。

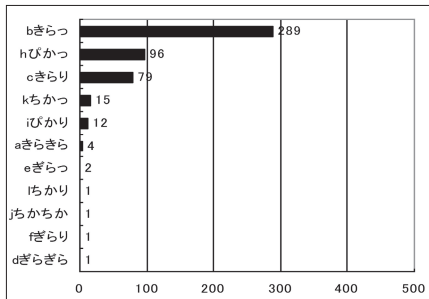
設問 2. 夜空で星が（ ）と瞬く。



＜図 4-2-2＞星-瞬く

設問 2 の光る主体は「星」、最も選択されたのは＜bきらっ＞であった。設問 1 とは異なる動詞「瞬く」は、光が明滅する瞬間を表すためか、促音の＜bきらっ＞や「り」の形の＜cきりり＞の選択率が上がっている。繰返しの形である＜jちかちか＞の選択率が上がっているが、＜jちかちか＞自体が点滅のイメージを持つからだと考えられる。上位 3 つはきら系の擬態語となっている。光る対象が同じ星の設問 1 でもきら系の選択率は高く、星はきら系と共起し、＜aきらきら＞も選択率が高くなったのではないかと考えられる。

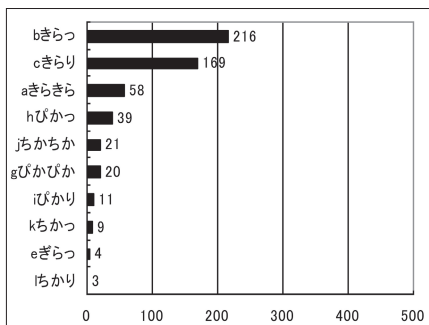
設問3. 流れ星が () と一瞬光って消えた。



<図4-2-3>流れ星-光って消えた

設問3の光る主体は「流れ星」、最も選択されたのは<bきらっ>であった。設問2と同じく瞬間的な光であることから、促音や「り」の形が上位にきているが、設問2と比べると<cきらり>は、第1位選択(169)から第3位選択(79)に下がっている。本設問文には「一瞬」という副詞があることからも、瞬間的に区切られたニュアンスの促音が選ばれ、ひとまとまりの落ち着いたイメージの「きらり」は選択率が下がったものと考えられる。

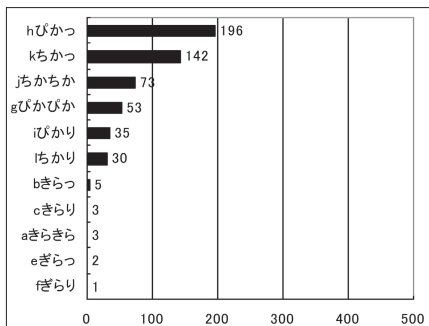
設問4. スイッチを押すと電球が () と光った。



<図4-2-4>電球-光った

設問4の光る主体は「電球」、最も選択されたのは<hびかっ>であった。設問4の場面はスイッチを押して光がついた瞬間であり、そのため促音の形が選ばれたものと思われる。設問1から3では選択率が高かったきら系の擬態語は、本設問では選択率が低く一桁台に留まった。設問4の光る主体が人工的なものであるという点により違いがでたものと考えられる。

設問5. スイッチを押すと蛍光灯が () と光った。

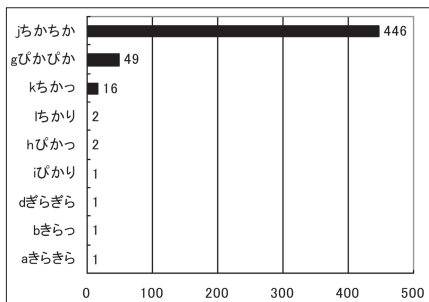


<図4-2-5>蛍光灯-光った

設問5の光る主体は「蛍光灯」、最も択されたのは<hびかっ>であった。設問4と比べると<kちかっ>の選択が70から142と約2倍になり、ちか系全体の選択率も上がっている。また、きら系の選択率は設問4と同様に一桁台に留まっている。蛍光灯が点灯する際に聞こえる音や、系統と光る対象に結びつきがあると考えられると、蛍光灯は電球よりも、ちか系と共起する機会が多いのではないかと考えられる。

設問6. 蛍光灯が切れて () と光が点滅している。

設問6の光る主体は「蛍光灯」、最も選択されたのは<jちかちか>であった。対象は設問

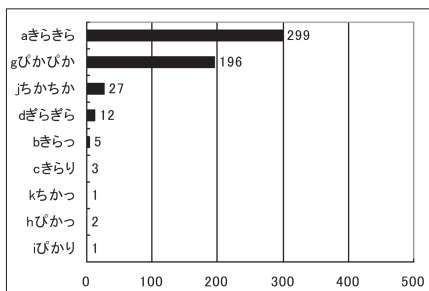


＜図４－２－６＞蛍光灯－光が点滅

5と同じだが、切れかけて光が点滅している状態である。500人中446人と、<jちかちか>の選択率が圧倒的である。<jちかちか>は光が目を刺激する様を表すことから、光の点滅により目が刺激されることをイメージしたと考えられる。また、繰り返しの形は継続的のイメージを持つが、語基が繰り返されることから、光が点いては消えることを繰り返す点滅のイメージも含むのではないかと考えられる。

設問7. 12月から街にイルミネーションが（

）と光っている。

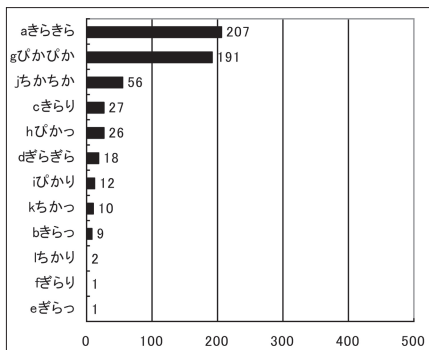


＜図４－２－７＞イルミネーション－光っている

設問7の光る主体は「イルミネーション」、最も選択されたのは<aきらきら>であった。繰り返しの形が上位4項目を占めた。これは、「12月から」という情報と、動詞がテイル形であることから、光が継続している状態だと感じたからだと考えられる。同じ人工の発光体が対象である設問4、5、6とは異なり、きら系の<aきらきら>が最も選択されている。これは、イルミネーションの持つ、通常の電球とは異なるイメージが関係するのではないかと考えられる。

設問8. 暗くなり、イルミネーションが（

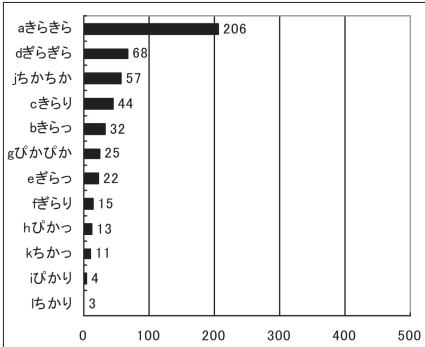
）と光りだす。



＜図４－２－８＞イルミネーション－光りだす

設問8の光る主体は「イルミネーション」、最も選択されたのは<aきらきら>であった。光が点いた瞬間の場面であり、設問7と比較して促音や「り」の形の選択率も上がっているが、継続的なイメージを持つ繰り返しの形が上位3項目を占めている。これは「光りだす」が初動であり、その後継続して光り続けるものと思ったからではないかと考えられる。設問7、8と、イルミネーションが主体の設問では繰り返しの形の選択が上位を占めていた。イルミネーションは点滅しているものも多く、繰り返しの形が点滅のイメージをもつと見ることができる。

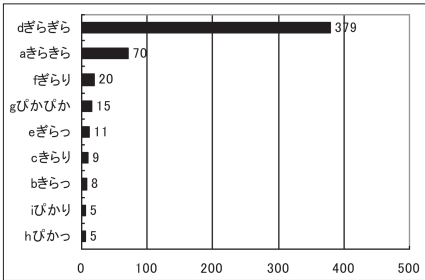
設問9. 積もった雪に日の光が反射して（ ）と眩しい。



<図4-2-9>日の光-眩しい

設問9の光る主体は雪に反射した「日の光」、最も選択されたのは<aきらきら>であった。雪に反射した光は継続的なものであることから、上位3つ<aきらきら><dぎらぎら><jちかちか>は繰返しの形が選ばれている。「眩しい」という表現から、より強い光を表す<dぎらぎら>や、目に痛い光と感じて<jちかちか>の選択が多くなると予想した。予想以上に<aきらきら>が選択される結果となった。これは、<aきらきら>またはきら系の擬態語の使用範囲が広く、様々な場面で使用できるからではないかと考えられる。

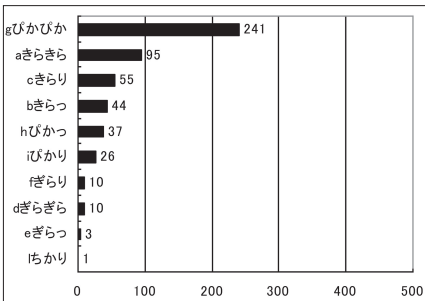
設問10. 太陽の光が（ ）と降り注いでいる。



<図4-2-10>太陽-降り注いでいる

設問10の光る主体は「太陽」、最も選択されたのは<dぎらぎら>であった。太陽の光が日中は継続的であることから、繰返しの形が選択されたものと考えられる。太陽の光を、大きさから見ても星や電球など他のものと比べて強いものだと感じ、濁音であるぎら系の<dぎらぎら>が圧倒的に選ばれたのだと考えられる。同じ日光の光である設問9よりも<dぎらぎら>の選択が多くなっているが、これは設問9の光が反射した間接的な光であるのに対し、本設問では直接的な光であるからだろう。

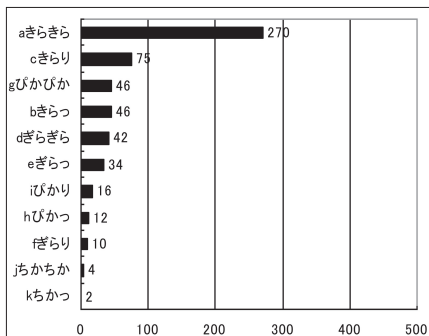
設問11. 磨かれたガラスが（ ）と輝いている。



<図4-2-11>ガラス-輝いている

設問11の光るものは「ガラス」で、星や電球と違い非発光体であり、磨いたり光を反射したりすることで輝いて見えるものである。最も選択されたのは<gびかびか>であった。びか系は光ることをあらわす他に、磨かれるなどして光沢のある様子を表す意味も持ち、中でも<gびかびか>は、「床をびかびかに磨く」のように用いることができる。本設問では「磨かれたガラス」であることから、そのため多くの人に選択されたものと考えられる。

設問12. 大きなダイヤモンドが () と輝いていた。

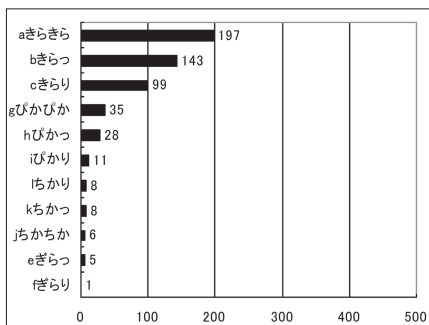


＜図4-2-12＞ダイヤモンド－輝いていた

ル形であることから、繰返しの形の<aきらきら>が選ばれたと考えられる。

設問12の光るものは「ダイヤモンド」、最も選択されていたのは<aきらきら>であった。設問11のグラスと同じく非発光体だが、宝石という価値のある物という点で、立派に見える様を表すこともある<aきらきら>がえらばれたのではないだろうか。また、「磨く」という表現がないことから、<gびかびか>の選択率が下がったと考えられる。辞書では<cきらり><hびかっ>にダイヤモンドが主体の例文があった。例文はで「輝く」「光った」である動詞部分が、設問12では「輝いていた」とテ

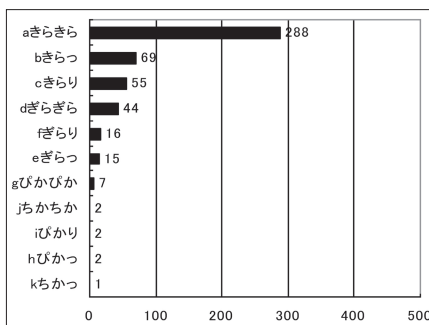
設問13. 小さなダイヤモンドが () と輝いていた。



＜図4-2-13＞ダイヤモンド－輝いていた

設問13の光るものは「ダイヤモンド」、最も選択されたのは<aきらきら>であった。設問12と第一位選択肢は変わらないが、<bきらっ>と<cきらり>の選択率が上がり、その差が縮んでいる。設問12との違いはダイヤモンドの大きさであり、小さくなったことにより光のニュアンスも小さくなったと感じ、瞬間的な光が継続する光より小さいと感じて促音の形を、小さくまとまっているとして「り」の形を選択したのではないかと考えられる。

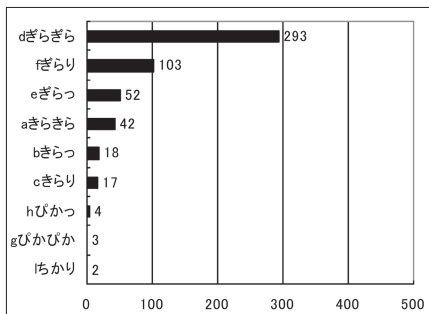
設問14. 瞳を () と光らせて、将来の夢を語る。



＜図4-2-14＞瞳－光らせて

設問14の光るものは「瞳」で、実際に瞳が光るのではなく、生き生きとした様子から輝いている様に見える状態を表す。最も選択されたのは<aきらきら>であった。「語る」というある程度継続する状態であることから、繰返しの形が選ばれたと考えられる。<aきらきら>は「きわだって立派なさま」も表す擬態語であり、夢を語るということでその人の様子が立派であると感じたのではないかと考えられる。

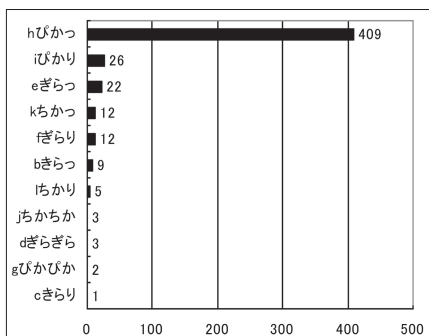
設問15. 瞳を（ ）と光らせて、野望を語る。



<図4-2-15>瞳—光らせて

設問15の光る対象は「瞳」、最も選択されたのは<dぎらぎら>であった。設問14で選択率が高かったきら系の濁音であり、より強い光のを表すきら系の選択肢が上位にきている。語る対象が夢より強い願望である野望へと変わったことにより、それを語る瞳の輝きをも強く感じさせたからではないかと考えられる。設問14、15では、きら系、ぎら系以外の系統の選択は10以下と少なく、「瞳を光らせる」という表現はきら系、ぎら系と共起すると言える。

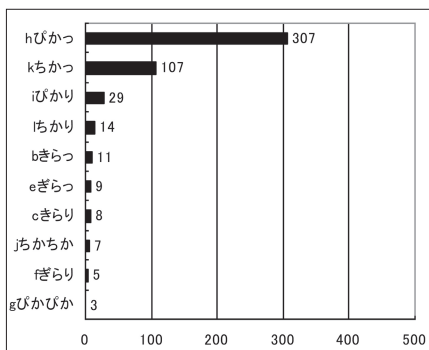
設問16. 稲妻が（ ）と光って落ちた。



<図4-2-16>稲妻—光って落ちた

設問16の光る主体は「稲妻」、最も選択されたのは<hびかっ>であった。稲妻の光は非常に瞬間的で、一度の稲妻で一区切りの光であることから、促音の形が選択されたものと考えられる。<hびかっ>が500人中409人と圧倒的に選択されている。また、他は選択率が低く、稲妻と<hびかっ>の共起関係が顕著に示された形となった。

設問17. カメラのフラッシュが（ ）と光った。



<図4-2-17>カメラのフラッシュ—光った

設問17の光る主体は「カメラのフラッシュ」、最も選択されたのは<hびかっ>であった。カメラのフラッシュは瞬間的で、光った後はすぐに消えるため、促音の形が選ばれたのだと考えられる。また、カメラのフラッシュを眩しいと感じることから、ちか系である<kちかっ>を選んだと考えられる。<bきらっ>の選択は少なく、カメラのフラッシュも電球や蛍光灯と同じく、ぴか系やちか系と共起することが明らかとなった。

5. 結果の考察とまとめ

星	a きらきら	光っている
流れ星	b きらっ	光って消えた
電球	d きらきら	光った
蛍光灯	e きらっ	光りたす
イルミネーション	g びかびか	光らせて
日の光	h びかっ	光って落ちた
太陽	i ちかちか	輝いている
グラス		輝いていた
ダイヤモンド		瞬く
瞳		点滅している
稲妻		眩しい
カメラのフラッシュ		降り注ぐ

＜図5-1＞光る主体、副詞、動詞のコロケーション

アンケートの設問にある光る主体と動詞、各設問の第一位選択の擬態語とを線で結んだものを、＜図5-1＞に示した。第一位選択肢にならなかった擬態語は省略した。

光る主体について見ると、人工の発光体ではイルミネーションのみ、きら系が第一位選択肢となっている。イルミネーションは電球や蛍光灯のように周囲を照らす目的に加え、飾りとしての目的を持つ。特に設問7では「12月から」という言葉から、クリスマスの様なイベントを連想し、飾りとしてのニュアンスをより感じたのではないかと考えられる。星、宝石、飾りとしてのイルミネーションは、「綺麗」というプラスイメージをもつものとして括ることができる。つまり、きら系の光はプラスイメージの光だと解釈できる。稲妻は、自然の発光体の中で唯一びか系が第一位選択にあった。これは、稲妻の持つ電気のイメージから、人工的な光と同じ様にびか系との結びつきが感じられるからではないかと考えられる。

動詞について見ると、「光っている」「輝いている」の様にテイル形の動詞の設問では、繰返しの方が第一位選択肢となっている。また、「光って消えた」「光って落ちた」の様に、光が途切れた様子を表す動詞では促音の形が選ばれている。これは、繰返しの方が持つ継続、促音の形がもつ一区切りという、それぞれのニュアンスによるもので、活用形の違いによって、選ばれる擬態語にも違いが出ると考えられる。擬態語を選択する際、系統は光る主体が、繰返しや促音のような形は動詞の活用形が、それぞれ選択材料になりやすいと考えられる。

繰返しの方の擬態語の多くが、光る主体でも動詞でも第一位選択肢となっており、他の形より使用頻度が高いと言える。中でも＜a きらきら＞は光る主体、動詞で共起するものが多く、使用範囲も広い。「り」の形の擬態語は第一位選択肢には無く、使用頻度が低いと考えられる。また、促音の形では＜e きらっ＞＜k ちかっ＞が第一位選択肢に無かった。『日本語オノマトベ辞典：擬音語・擬態語4500』で、「星がびかびかとまたたいている」「夜空に星がちかちかとまたたく」という例文があったが、同じく「星」が「瞬く」文章である設問2での第一位選択肢は＜b きらっ＞であり、＜g びかびか＞＜j ちかちか＞の選択率は高くなかった。例文があることから、用いることはできるが、＜b きらっ＞やきら系等と比べ、使用頻度は低いものだ

と考えられる。用いることができる擬態語の数が多い場合でも、私たちはその中から、その時の表現に最も適しているものを選んでいるのだと考えられる。つまり、第一位選択肢が多いきら系、ぴか系の擬態語の方が、ぎら系、ちか系の擬態語よりも選択の順序が上にあるのではないかと考えられる。

擬態語は使用者に身近な言語であり、個人の感性の違いによるバリエーションがあると考えられる。しかし、アンケートの結果で回答が大きく偏っている項目もあることから、大まかな認識や使い分けはあると考えられる。同じ意味に思える擬態語であっても、主体や動詞、副詞等の文脈により、使い分けがされ、特に光る主体の種類によって、共起しやすい系統があることが分かった。オノマトベは音との結びつきが強い言葉であり、光る主体と系統との共起に、音象徴によるイメージが関係するのではないかと考えられる。

本稿では、調査対象を主に用いられていると思われるものに絞ったため、対象とした系統以外の擬態語や、撥音や長音の形、オノマトベ標識によらない不定形のものについては調査ができなかった。今後は調査範囲を広げて調査する必要があると考えられる。

【参考文献】

- 浅野鶴子・金田一春彦（1978）『擬音語・擬態語辞典』角川書店
 荻阪直行（1999）『感性のことはを研究する－擬音語・擬態語に詠む心のありか－』
 小野正弘（2007）『オノマトベがあるから日本語は楽しい：擬音語・擬態語の豊かな世界』平凡社
 田嶋香織（2006）「オノマトベ（擬音語・擬態語）について」関西外国語大学留学生別科『日本語教育論集』16号
 田守育啓（2002）『<もっと知りたい！日本語>オノマトベ 擬音・擬態語をたのしむ』岩波書店
 田守育啓・ローレンス・スコウラップ（1999）『日英語対照研究シリーズ（6）オノマトベ－形態と意味－』くろしお出版
 日向茂男・笹目実（1999）「語形からみた擬音語・擬態語2」『東京学芸大学紀要 第2部門 人文科学』50

【参考辞書類】

- 『大辞泉』（1998）小学館
 『使い方の分かる類語例解辞典』（2003）小学館
 『日本語オノマトベ辞典：擬音語・擬態語4500』（2007）小学館
 『日本国語大辞典（第二版）』（2002）小学館
 『日本大百科全書』（1994）小学館
 『プログレッシブ英和中辞典』（2002）小学館

（まえた・ちなみ）

【別添資料】

光のオノマトペに関するアンケート

以下の文章に用いる擬態語を、下記a~lの中から選び、括弧の中に記号で記入してください。
(複数選択可)

a きらきら	b きらっ	c きらり	d ぎらぎら	e ぎらっ	f ぎらり
g ぴかぴか	h ぴかっ	i ぴかり	j ちかちか	k ちかっ	l ちかり

1. 夜空に星が（ ）と光っている。
2. 夜空で星が（ ）と瞬く。
3. 流れ星が（ ）と一瞬光って消えた。
4. スイッチを押すと電球が（ ）と光った。
5. スイッチを押すと蛍光灯が（ ）と光った。
6. 蛍光灯が切れて（ ）と光が点滅している。
7. 12月から街にイルミネーションが（ ）と光っている。
8. 暗くなり、イルミネーションが（ ）と光りだす。
9. 積もった雪に日の光が反射して（ ）と眩しい。
10. 太陽の光が（ ）と降り注いでいる。
11. 磨かれたガラスが（ ）と輝いている。
12. 大きなダイヤモンドが（ ）と輝いている。
13. 小さなダイヤモンドが（ ）と輝いている。
14. 瞳を（ ）と光らせて、将来の夢を語る。
15. 瞳を（ ）と光らせて、野望を語る。
16. 稲妻が（ ）と光って落ちた。
17. カメラのフラッシュが（ ）と光った。

自由記述：アンケートに関する意見等ありましたらお書きください。

国籍（ ） 性別（男・女） 出身地（ ）
年齢（10代・20代・30代・40代・50代・60代以上） 職業（学生・社会人）

ご協力ありがとうございました。